



# 花のお江戸を歩く会

## 紅葉の彩の国大宮路散歩

### 「武蔵一宮氷川神社～盆栽町～見沼代用水」

平成25年11月17日(日)

#### 《散歩みちガイド》

花のお江戸もいよいよ埼玉県に上陸です。武蔵の国の一宮である氷川神社は、2400年の歴史を誇ります。平安時代に開かれた大宮氷川神社は、全国氷川信仰の総本社です。ます。江戸時代初期に大宮は中山道最大の宿場町として歴史に登場します。

盆栽村は関東大震災により駒込、巣鴨、本郷などで営んでいた盆栽業者が被災したのを期に、盆栽に適した大宮に移住してきたものです。

そして、8代将軍徳川吉宗の時代に、「享保の改革」の一環として埋立てや干拓が奨励されました。見沼代で工事を担当した幕府の役人「井沢弥惣兵衛」は、八丁堤を切り旧芝川を排水路として見沼溜井の水を落として水田を開くと共に、溜井の代用となる水源として利根川から水を引く用水路を開削し、大水田地帯、つまり日本でも最大級の「見沼田んぼ」の誕生です。今日は、歴史的な古社と緑に包まれた盆栽村と深まる秋の見沼代の大自然を楽しみます。

#### 《散歩みち順路》

JR大宮駅東口→すずらん通り→一宮通り→氷川神社入口→氷川神社第二鳥居→郷土資料館T→武蔵一宮氷川神社T→大宮公園→県立歴史民族博物館T→盆栽村散策→漫画会館→盆栽美術館T(有料)→見沼代用水路西縁散策→見晴公園→寿能城跡→大宮公園T→氷川神社参道→JR大宮駅

#### 《個別ガイド》

##### ① 江戸時代の大宮宿

江戸時代の大宮宿は、天保14年(1843年)の調べで、町並みは1km。宿内人口1,508人、宿内家数319軒、脇本陣は9軒で中山道の宿場としては最多である。問屋場4軒、旅籠25軒。他に、紀州鷹場本陣(北澤家)1軒。かつては氷川神社参道が中山道だった時代があった。大宮の地名は氷川神社の大きい宮に由来する。宿場らしく品川宿、千住宿同様に「涙橋」もあった。ということは刑場があったということだ。もちろん花街もあったのだろう。いろいろ想像すると面白い。→すずらん通り→中山道→氷川神社入り口

##### ② 参道と大宮宿の歴史

大宮宿は、戦国の世が終わりに近づき、関東が徳川体制となった1591年に宿駅に指定されたといわれ、この頃の街道(中山道)は、一の鳥居から氷川神社の参道を通り、途中で左折していました。ところが、参道を通る道筋では街道が大きく迂回し、しかも神社の神



5年(1595)、徳川家康は伊奈備前守忠次を奉行として、社頭を残らず造営させたという記録が残されている。関東では氷川神社を名乗る神社が280に及ぶ。

#### ④ 大宮公園T

明治18年、太政官布達により氷川公園の名称で誕生し、同31年に県が管理することになりました。現在ある県営公園の中では最も長い歴史を持つ公園です。造園には日本の公園造りのパイオニアである本多静六博士が尽力しました。その後、昭和37年に都市計画公園として決定され、昭和55年「第二公園」が大宮公園の東側に、更に平成13年「第三公園」が第二公園の南側に開設されました。樹齢百年を超える赤松がそびえる赤松林や、名物の1,200本もの桜をはじめ、新緑や紅葉が美しい樹木がたくさんあり、四季おりおりの変化が楽しめます。→**県立歴史民族博物館T(前川国夫設計)**

#### ⑤ 盆栽村

江戸時代から明治・大正時代まで、現在の東京都文京区千駄木にある団子坂には、多くの植木屋が集まって、菊人形づくりや盆栽業を営んでいました。しかし、大正12年(1923)に起きた関東大震災をきっかけに、より広い土地を求め、盆栽業者だけの村を作る構想によって誕生したのが、大宮盆栽村です。

現在の盆栽村周辺には、およそ9軒の盆栽園が営まれており、大宮盆栽村の名は世界的に知られています。村内には、もみじ通り、けやき通り、さくら通りなどがあり、四季折々の散策が楽しめる観光地ともなっています。→**民間の盆栽園**

#### ⑥ 漫画会館T

この会館は、大宮市が生んだ日本の近代漫画の創始者である北澤楽天(きたざわらくてん・1876~1955)の業績を記念するとともに、広く漫画文化の発展をはかることを目的としてその居宅跡に建設された施設である。一階の楽天常設展示室には、楽天の作品原画、手紙、勲章、写真などが展示してあり、二階の特別展示室では、年に数回展示替えをして、現代漫画家の作品展などを催している。

楽天は福澤諭吉に認められ、諭吉の創刊した新聞、時事新報(明治、大正、昭和初期まで発刊していた有力な日刊紙)紙上で国際政治から子供向けまで広い範囲の漫画を書いていた。「漫画」という言葉も、それまでのおどけた絵とかポンチ絵に変わって楽天が使い始めたものである。

#### ⑦ 盆栽美術館T 65歳以上→150円、一般→300円(見学後小休息)

世界で初めての公立の「盆栽美術館」。名高い大宮の盆栽村に近接して設けられた当館は、旧高木盆栽美術館のコレクションを核とした盆栽の名品、優品をはじめ、盆栽用の植木鉢である盆器や、一般には水石と呼ばれる鑑賞石、盆栽が画面に登場する浮世絵などの絵画作品、それに、盆栽に関わる各種の歴史・民俗資料等を系統的に収集、公開することにより、さいたま市の伝統産業にも指定されている盆栽の文化をひろく内外に発信することを目的としている。→**川島橋**

## ⑧ 見沼代用水路西縁散策

埼玉県東部から南部の水田地帯を流れる関東平野最大の農業用水。幹線水路延長 84 キロメートル、灌漑（かんがい）面積 1 万 7000 ヘクタール。江戸中期、井沢弥惣兵衛（やそべえ）によって掘削された。名称は、新田開発のために干拓された見沼溜井（ためい）に代わる用水の意である。行田（ぎょうだ）市下中条（しもちゅうじょう）付近の利根（とね）川右岸に取水口をつくり、途中、星川の流路の一部を使い、元荒川や綾瀬（あやせ）川は伏越（ふせごし）といわれるサイホンで立体交差し、末端の見沼付近で東縁（ひがしべり）・西縁用水に分かれる。さらに東縁用水は川口市から東京都に至り、西縁用水は大宮台地を切って高沼用水として荒川に達する。利根大堰（おおぜき）ができてから、旧取水口は閉鎖され、大堰から毎秒 45 トンの水を供給するようになった。

### ★見沼代用水の開発の歴史

1629年（寛永6）関東郡代伊奈（いな）半十郎忠治（ただはる）が、武蔵（むさし）国足立（あだち）郡大間木（おおまぎ）村（現さいたま市緑区）に八丁堤を築いて造成した見沼溜井は、下流8か領221か村の水源として5000ヘクタールの水田を灌漑した。しかしこれにより沼周辺の地は水没し、上流は排水不良、下流は用水不足に悩まされた。享保（きょうほう）年間（1716～36）の幕政改革による新田開発奨励策のもとで、これらの問題を解決し、あわせて溜井干拓による新田開発を目的として代用水路の開削が計画され、幕府勘定吟味（かんじょうぎんみ）役井沢弥惣兵衛為永（ためなが）に施工が命ぜられた。為永は1725年（享保10）溜井を検分、翌年測量に着手、1727年10月から1728年の2月までの5か月間で、延長84キロメートルに及ぶ大工事を完成させた。取水口には巨大な木造樋管（ひかん）を設け、途中、星川を利用して用水を導き、他の河川と交差する所では懸樋（かけどい）を架けるなど、さまざまな技術が駆使された。一方この工事と並行して見沼中悪水路（なかあくすいろ）（芝川）が掘削され、溜井の干拓が行われ、周辺を含めて新たに1800町歩の新田が開かれた。なお、為永は31年に八丁堤の北で東・西縁用水と芝川を結ぶ通船堀を開き、舟運の便を図った。

## ⑨ 寿能城跡

寿能城は、永禄3年頃（1560）、岩槻城の支城として北条氏側の川越城に対する備えとして築かれたといわれています。城主である潮田氏は、太田資正の四男資忠で母方の性を名乗ったといわれています。なお城は、豊臣秀吉の小田原攻めで廃城となりました。現在まで発掘調査がされていないので、詳しいことはわからないようです。→塩田橋→万葉の並木道→大宮公園T→氷川神社参道（平成広場）→JR大宮駅（解散）